

『秘書様は溺愛系』

著:若月京子

ill:明神 翼

「それで、真白くん。家出すると宣言して出てきたんですよね？」

「はい。お父さんのバカーッって怒鳴ってきました」

「そうですか。では、しばらくここで一緒に住むということで。少しお父さんから離れて考える時間が必要かもしれませんね」

「すみません…お世話になります」

「では、ご両親が心配しているでしょうから、電話をしてあげてください」

「でも……」

「真白くんのような子供がいたらどうしても過保護になるでしょうし、検索願いを出されたら困るでしょう？ きちんと話して、考える時間が欲しいとお願いしたら、きっと聞き入れてもらえると思いますよ」

「……」

真白はその言葉に考え込み、コクリと頷く。

「分かりました。電話、します」

「よかった」

携帯電話で家に連絡を入れると、すぐに母が出て心配したと怒られる。

それにごめんなさいと謝って、自分が今は知り合いのところにいるから大丈夫と言う。それに、こここのところの父とのやり取りにまいってしまい、少し頭を冷やしたいこと、大学にはちゃんと行くから一人で考える時間が欲しいと訴える。

最初、母はもちろん反対したが、将来のことについて真剣に考えるいい機会だからと言うと、渋々ながら了承してくれた。

後ろで何やら父が喚(わめ)いていたが、そちらの説得は母に任せる。会社ではワンマンな父も、母には弱いのだ。

真白がふうっと大きく息を吐き出しながら通話を切ると、その間室内を行ったり来たりして動き回っていた長嶺が言う。

「お風呂に入って、ゆっくりしてください。入浴剤は棚にあるので、お好きなのをどうぞ。もらいものですけど。ああ、着替えはこちらを使ってください」

そう言って長嶺が渡したのは、新品の下着と歯ブラシだ。それに、長嶺のだろろうパジャマもある。どうやら真白のために入浴の用意をしてくれていたらしい。

「弟がここで泊まり込みになることがあるので、いつも予備を置いているんですよ。少し大きいかもしれませんが」

「ありがとうございます。とても、助かります。ボク、財布を持って出てこなかったから……」

「明日の朝、おうちまで車で送るので、必要なものを取ってくるといいですね。着替えや、大学の教科書やノートも必要でしょう」

「でも、あの…本当にいいんですか？ 迷惑…ですよ」

「いいえ、ちっとも。嬉しいと言ったでしょう？ 私は、迷惑なら迷惑とはっきり言います」

よ」

「それならいいんですけど……」

「ベッドは一つしかありませんが、キングサイズですから大きさは充分です。一緒に寝ましょうね」

その言葉に真白はプルプルと首を横に振る。

「と、とんでもない。ボクは、このソファで大丈夫です。これって、ソファベッドですよね？」

「そうですが…真白くんを抱っこして眠りたいのに」

「抱っこって……」

想像して、真白は顔を赤くする。

「お、お、お、お風呂、入ってきます！」

真っ赤な顔でバタバタと逃げ出す真白に、長嶺は楽しそうにクスクスと笑った。

バスルームに逃げ込んだ真白は、カチャリと鍵をかけてからハートと息を吐き出す。

「長嶺さんの冗談って、分かりづらい……」

それになんだか恥ずかしくもあると、赤くなった顔をペシペシ叩いた。

「はあ…お風呂、入ろう」

真白はパパッと服を脱いで、浴室に入る。

「わあ、広～い」

一人暮らし用の1LDKの部屋なのに、足を悠々(ゆうゆう)と伸ばせそうなバスタブがある。

友人の部屋のはユニットバスでこそなかったが、これの半分くらいの大きさだったから、しみじみと高級マンションなんだなあと思った。

「まあ、いいや。お風呂入ろうっと」

真白はシャワーでザッと体を洗い流し、入浴剤がズラリと並んだ棚を見る。

外国のもののようなのだが、英語ではなかった。どうやらフランス製のものらしい。

「絵がついててよかった。んー…オレンジにしようかな」

柑橘(かんきつ)系の香りは好きだ。家でもよく柚子(ゆず)やグレープフルーツの入浴剤を入れている。

真白はオレンジのボトルの中身を注ぐと、手でザッと掻き混ぜて湯に浸(つ)かる。

「ふわあ～…いい香り。オレンジと…カモミール？　なんか、落ち着く……」

全身から力を抜いて、真白はその心地よさにひたった。

広い浴槽での入浴をしっかりと堪能して真白が出てくると、長嶺は机に向かって仕事をしていた。

「お風呂、ありがとうございました」

「入浴剤はどうでしたか？」

「オレンジとカモミールのやつ、すごくいい匂いでした！」

「それはよかった。ところで、もう十一時ですよ。私はもう少し仕事が残っているのですが、真白くんは疲れているでしょう？　先に眠ってください。ベッドは、あの衝立(ついたて)の向こうにー」

「この、ソファベッドを使わせてもらいます。毛布とか貸してもらえますか？　弟さんが泊まる時って、これを使うんですよね？」

「はあ…分かりました。とても残念ですが」

長嶺はそう言って肩を落とし、クローゼットの中を探り始める。
真白はソファの背凭(せ もた)れを倒してベッドに変え、長嶺が渋々出してきてくれた薄いパッドとシーツを敷く。
毛布と枕を置けば、どこから見てもベッドだ。小柄な真白が寝るには充分である。
「おやすみなさい」
「寂しくなったら、私のベッドに来ていいですからね」
そんなことを言う長嶺に、真白はクスクス笑いながら「はい」と答えておいた。
真白が毛布の中に潜り込むと、長嶺はベッドのところから移動させてきた衝立で光を遮(さえぎ)って持ち帰った仕事をする。
小一時間ほどで終えたとき、真白はスヤスヤと気持ちよさそうに寝入っていた。
「可愛い……」
深い眠りのようで、長嶺が小さく呟(つぶや)いても反応はない。
長嶺がソツと抱き上げても目を覚ますことはなく、そのままベッドへと連れていかれてしまった。
毛布を肩まで引き上げ、長嶺がその隣に潜り込むと、無意識のうちにぬくもりを求めて擦り寄ってくる。
長嶺は思わず微笑みを浮かべながら真白を抱え込み、眠りへと落ちていった。

本文 p37～42 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>